

英語能力判定テストによる英語力分析と英語苦手学生への方向性 －自由が丘産能短期大学での英語再学習プログラムへの活用－

An Analysis of English Ability as Measured by the Placement Test, Relative to the Relearning Programs at JIYUGAOKA SANNO College

池 田 るり子
Ruriko Ikeda

抄 録 英語再学習プログラム実施3年目を迎え、本学カリキュラム委員会での検討の結果、2012年より新規外国語科目「実践韓国語」が加わり、今後、英語だけでなく、そのほかの語学（中国語・韓国語）を含め新たな外国語学習プログラム開発が課題となってくる。

2011年度は、その準備段階として、本学へ入学してくる学生（1年生）の英語能力の把握を行い、英語力の問題点をより具体的にすることが課題である。また、前年度に実施した「英語に関する意識」調査・分析を継続し、英語力に問題のある学生に対する方策を検討する。本学において、2012年度に向けての外国語学習プログラム開発へどのような提案ができるか、まずは、英語に対する現状を把握し、今後の方向性、あり方を整理する意義は大きい。

キーワード 英語能力判定テスト, 異文化理解, 外国語教育, 国際マナー, コミュニカティブ・アプローチ
The English Placement Test, Intercultural communications, Foreign Language Educations,
International Protocol, Communicative Approach

1. 研究の背景と目的
2. 本学学生の英語力の問題点
 - 2.1 英語能力判定テスト集計結果
 - 2.2 英語力の分析
3. 本学学生の英語に関する意識
 - 3.1 英語意識調査結果
 - 3.2 英語とのかかわり方
4. 今後の外国語学習プログラムの方向性
 - 4.1 共通達成目標とレベル設定
 - 4.2 異文化理解と外国語教育
 - 4.3 コミュニカティブ・アプローチによる学習法の有効性
5. 今後の課題

2012年 5月29日 受理

1. 研究の背景と目的

英語再学習プログラム実施3年目を迎え、本学カリキュラム委員会での検討の結果、2012年より新規外国語科目「実践韓国語」が加わり、今後、英語だけでなく、そのほかの語学（中国語・韓国語）を含め新たな外国語学習プログラム開発が課題となってくる。

2011年度は、その準備段階として、本学へ入学してくる学生（1年生）の英語能力の把握を行い、英語の問題点をより具体的にすることが課題である。また、前年度に実施した「英語に関する意識」調査・分析を継続し、英語力に問題のある学生に対する方策を検討する。本学において、2012年度に向けての外国語学習プログラム開発へどのような提案ができるか、まずは、英語に対する現状を把握し、今後の方向性、あり方を整理する意義は大きい。

ここでは、本学の学生の英語能力を理解するため、「英語能力判定テスト」と英語に関する自己評価アンケートを実施し、英語力の傾向や問題点について情報収集を行う。また、収集情報を基に具体的な傾向を把握する。

2012年度より実施予定の外国語学習プログラム（英語、中国語、韓国語）に向けて、外国語教育の方向性、あり方、課題を明確にする。なお、上記については、アンケート調査、統計分析を中心に研究を行う。

2. 本学学生の英語力の問題点

2.1 英語能力判定テスト集計結果

本学では、2010年度より、「基本的な英語知識の理解」を英語能力判定基準とし、既存の英語科目「基礎からの英語Ⅰ」の全履修者を対象とし、英語判定能力テストとして、英

語再履修対象者選定試験（以下「英語判定能力テスト」と表記）を実施した。ここでは、2010年度のデータを使用する。

英語能力判定の基準については、以下の①基本的な単文の文型（SVとSVO）の理解、②疑問形（Yes/No Questionと5W1H Question）の理解、③4つの時制（現在形、過去形、未来形、現在進行形）の理解と定めた。

作問に関する形式基準は以下の「①採点が容易にできる選択問題で作問する。②試験時間は20分程度（15分～20分）とする。③英語能力判定基準に合わせ、TOEICの文法編の問題形式を参考に参考にする。④作文数は、計50問を目安とする。」である。

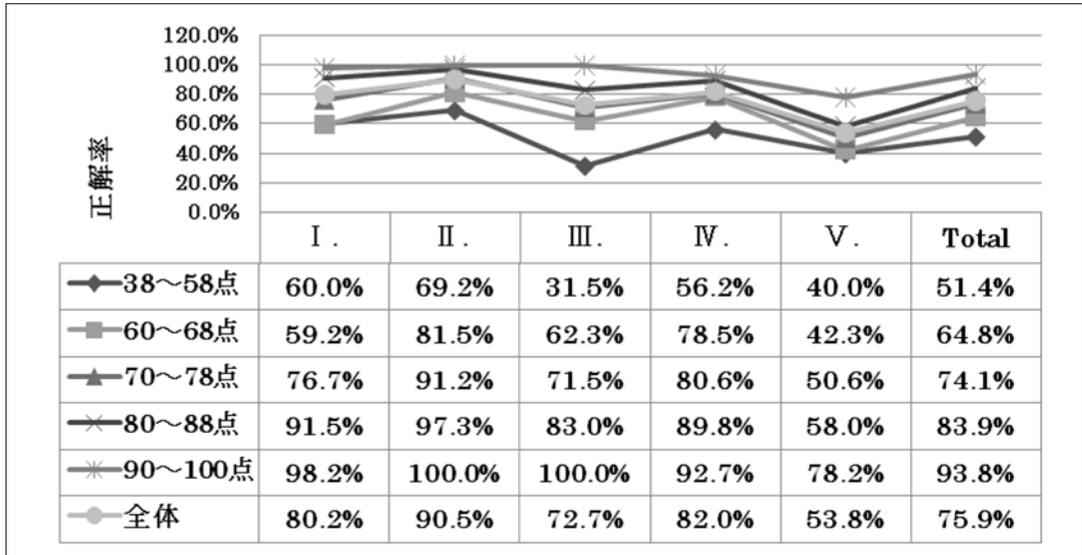
2010年前期に実施した「英語能力判定テスト」で本学の学生の英語力の傾向があきらかになると考え、「英語能力判定テスト」結果の集計を行った。図表1-1)

「英語能力判定テスト」の作問構成として、5つの項目、Ⅰ疑問形（Yes/No Questions）、Ⅱ基本文型（SV、SVO）、Ⅲ疑問形（5W2H）、Ⅳ時制、Ⅴ複文の時制の一致とし、各10問2点配点とした。難易度はⅠからⅤに向けて高くなるように作成し、正解率が低くなる予測した。

また、今回の全体集計結果から、5つのグループ（100点～90点、90点未満～80点、80点未満～79点、70点未満～60点、60点未満）に分け、英語能力別の集計も行った。図表1-2～1-6)

調査対象者全体の正解率を見ると、本学の英語履修者の傾向として、全体的に英語判定能力基準において、Ⅴ以外のⅠ、Ⅱ、Ⅳでは、82%～90.5%、Ⅲでは、72.7%の正解率であった。ⅡよりもⅠの方の正解率が低くなる傾

図表1 英語能力判定テスト項目別正解率集計



向があり、ⅢよりもⅣの方が正解率が高くなる傾向が強い。応用問題であるⅤがⅠ～Ⅳよりも低い53.8%の正解率であった。

つまり、本学の学生は、基本文型に理解があり、会話で必要とされる疑問形については、単純な疑問形(Yes/No Questions)は80%と理解度が高いが、より具体的な内容を引き出すために必要な疑問形(5W1H)については、72.7%とやや低い。難しいと予想されていた時制の理解については、82%と予想以上に高い。ただし、Ⅰ～Ⅳは単文による問題で作成し、Ⅴの複文による応用問題については、Ⅳ同様の時制に関する問題だが、53.8%と全体的に低い結果となった。

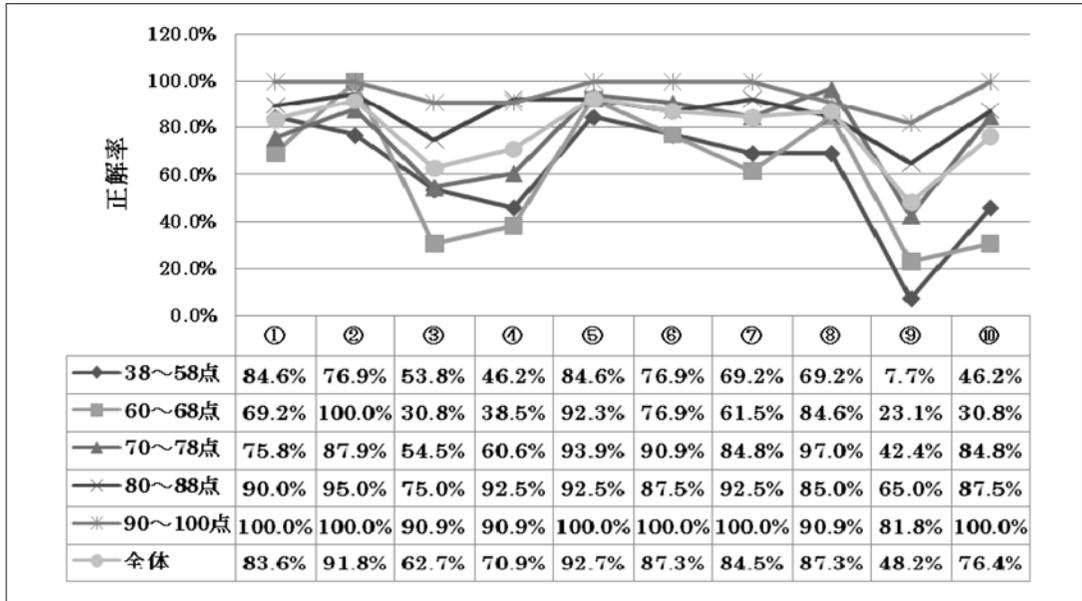
60点未満の学生については、全体的に正解率が低く、Ⅲ31.5%、その他のⅠ60%、Ⅱ69.2%、Ⅳ56.2%、Ⅴ40%と全体の正解率より40%～13%の大きな差があった。

Ⅰ～Ⅴまでの各項目別、各項目の問題別の集計を行った。結果は以下のとおりである。

Ⅰでは、主語(You, He/She, They/We, It/This)に対して、①～⑥まではBe動詞、⑦～⑩までは一般動詞との動詞形変化の理解を問う項目であった。⑨主語がTheyの場合の一般動詞(Do)の正解率が48.2%、③主語がHe/Sheの場合のBe動詞(Is)の理解が62.7%と低く、その反面、⑧主語がHe/Sheの場合の一般動詞(Dose)の理解は、87.3%と高かった。同様に②主語がYouの場合のBe動詞(Are)の理解は91.8%、⑤Thisが主語の場合のBe動詞(Is)の理解は、92.7%と高く、⑦Youが主語の場合の一般動詞(Do)の理解も84.5%と高かった。図表1-2)

60点未満の学生については、Be動詞については、正解率が、④主語がTheyの場合、46.2%、③主語がHe/Sheの場合、53.8%、と低い。一般動詞の場合は、⑨主語がTheyの場合、7.7%、⑦主語がYouの場合、と⑧主語がShe/Heの場合では、両方とも69.2%とかなり低い。その他については、76.9%～

図表1-2 英語能力判定テスト疑問形 (Yes/No Question)

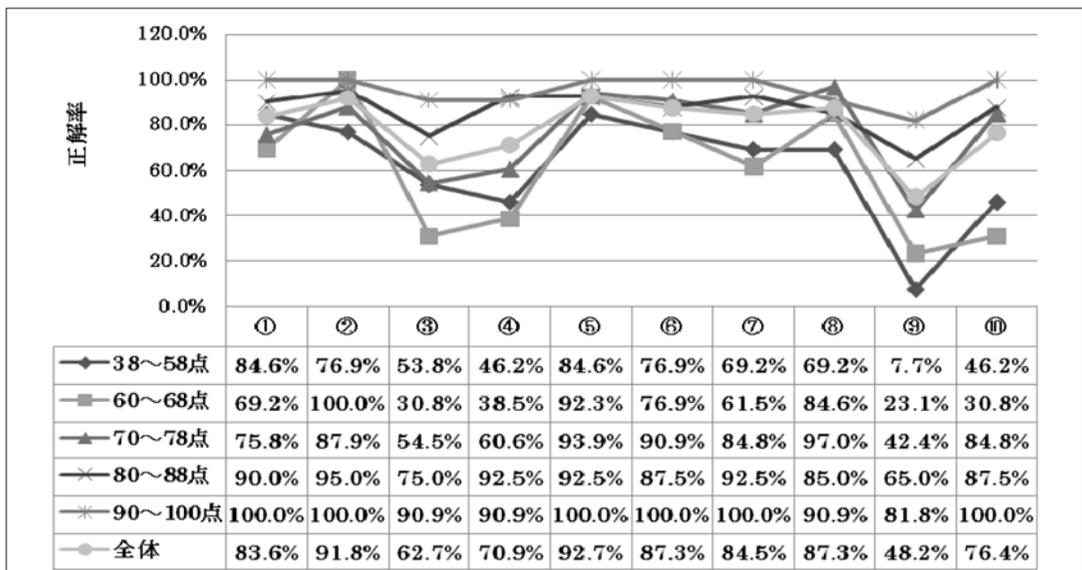


84.5%の正解率であった。

IIでは、主語 (You, He/She, They/We, It/ This) に対して①～⑤ではBe動詞、⑥～⑩では一般動詞との動詞変化の理解を問う問題

であった。Be動詞の場合、①②主語がIや Youの場合100%，③主語がHeの場合、94.5%，それ以外の項目でも82.7%～94.5%の高い正解率だった。図表1-3)

図表1-3 英語能力判定テスト基本文型 (SV型とSVO型)



60点未満の学生については、Be動詞の場合、①②主語がIやYouの場合100%の理解があり、⑤主語がThisの場合、76.9%と低くはなかった。一般動詞の場合は、⑧主語がShe/Heでは、23.1%とかなり低い。それ以外の⑥～⑩一般動詞について23.1%～69.2%と低い正解率であった。

Ⅲでは、① When, ② Where, ③ Why, ④ Who, ⑤ Whose, ⑥ What, ⑦ Which, ⑧ How, ⑨ How much, ⑩ How manyの疑問形の問題について、⑥ What (何) では44.5%, ⑦ Which (どちら) では68.2%, ⑧ How (どのように) では71.8%, ⑤ Whose (だれの) では75.5%であった。⑩ How many (いくら+数えられる名詞) が78.2%に対し、⑨ How much (いくら+数えられない名詞) は90.9%と高かった。その他の疑問形(① When, ② Where, ③ Why, ④ Who)については、83.6%～90.9%と高い正解率であった。図表1-4)

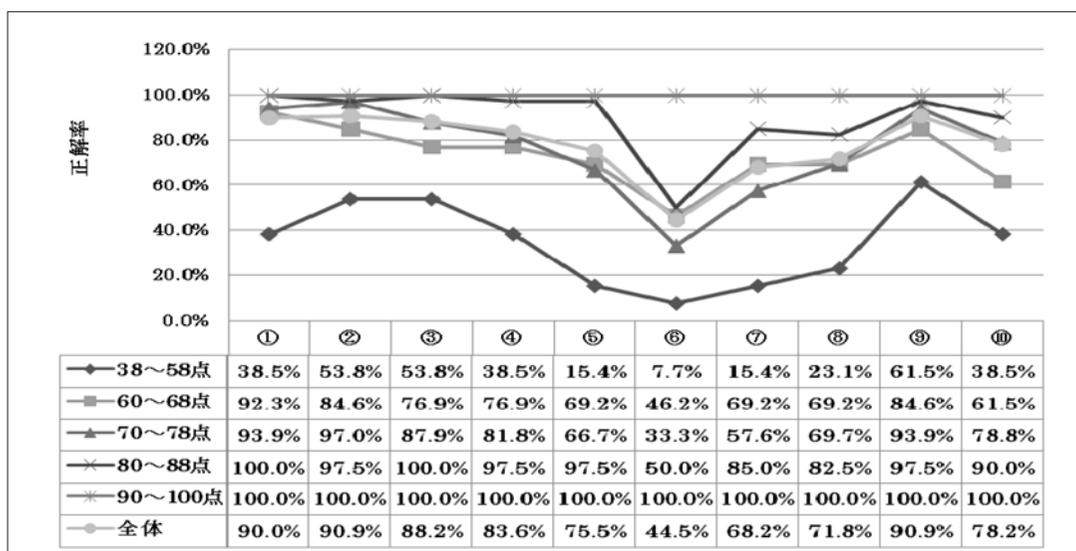
60点未満の学生については、全体の正解率と比較して7.7%～61.5%と全体的にかなり低い。

Ⅳでは、時制について一般動詞の変化の理解を問う問題であった。①～③では、Itが主語、④～⑩では、Iが主語とし、①④⑦現在形、②⑤⑧過去形、③⑥⑨未来形、⑩現在進行形とした。全体的に80%～98.2%と正解率が高い。⑦一般動詞の現在形で主語がIの場合については、現在完了形と現在形の違いの理解を問う問題だったため、51.8%と低い。基本的に時制についての理解は、高かった。図表1-5)

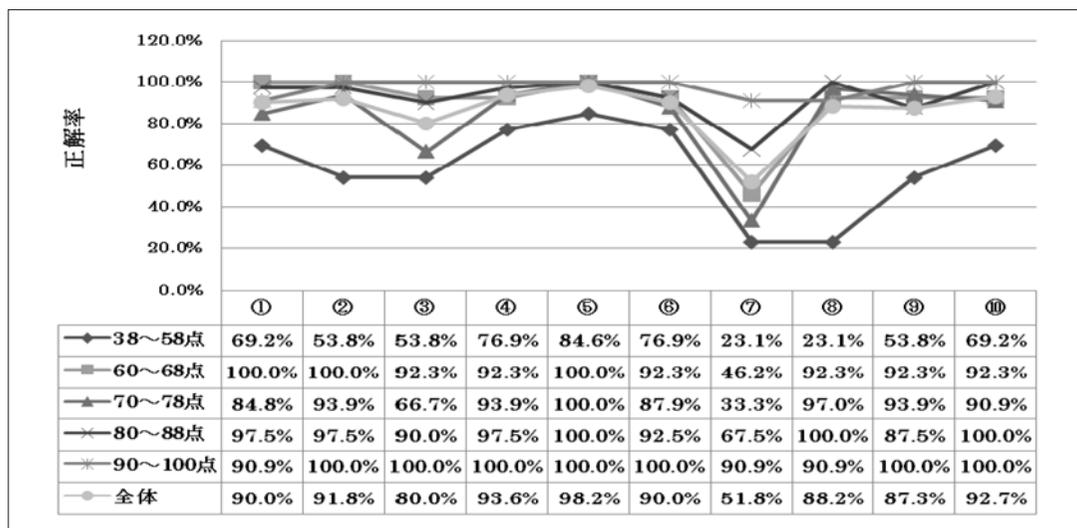
60点未満の学生については、一般動詞の場合で⑦現在形の主語がIの場合と⑧過去形の主語がIの場合では、23.1%であり、②過去形のItが主語の場合と③未来形のItが主語の場合、53.8%, ①現在形のItが主語の場合、69.2%であった。基本的に時制についての理解が低かった。

Vでは、複文での時制の一致を問う問題で、

図表1-4 英語能力判定テスト疑問形(5W1H)の理解



図表1-5 英語能力判定テスト 時制の理解

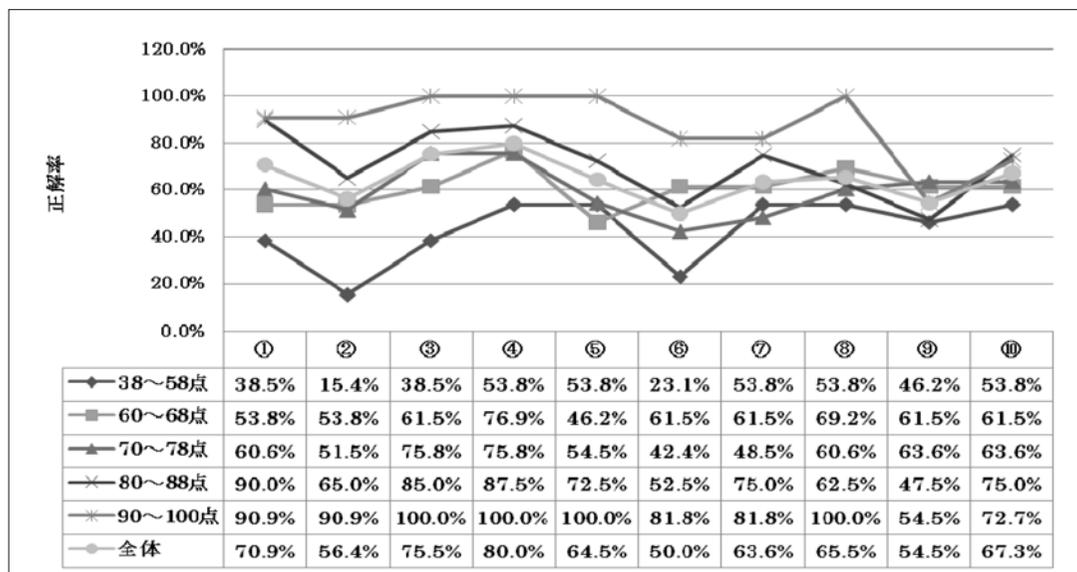


応用問題とした。一般動詞で未来形、主語がIの場合の時制一致については、⑥50%、⑨54.5%と低い。②過去形の主語がItの場合の時制一致では、56.4%だったが、過去形の主語がIの場合、⑤64.5%、⑧65.5%であった。単文での時制が、理解されている割には、複

文での時制では、20%以上低くなる傾向がある。図表1-6)

60点以下の学生については、15.4%～53.8%の幅があり、②過去形のItが主語の場合、15.4%、未来形の主語がIの場合、⑥23.1%、⑨46.2%、①現在形のItが主語の場

図表1-6 英語能力判定テスト時制一致の理解



合と③未来形の Itが主語の場合では、38.5%、と半数以下の低い正解率であった。その他の④⑤⑦⑧については、53.8%であった。

2.2 英語力の分析

本学の英語履修者は、上記の結果から、基本的な英語能力判定の基準の①基本的な単文の文型 (SVと SVO) の理解度が低くはない。また、②疑問形 (Yes/No Questionと5W1H Question) や③4つの時制 (現在形, 過去形, 未来形, 現在進行形) の理解度の高い学生も存在し、全体的に、現在完了形以外の時制については、理解されている。最初に設定した英語能力判定基準の内容については、全体的に理解されていることがわかった。

80点以上の学生と70点未満～60点の学生間の比較でも大きな差がみられ、教員は、かなりの英語能力の格差が混在するクラスを授業運営していることが分かった。

80点以上の学生に比べ、80点未満～60点の学生の傾向として基本的な主語に対する動詞の組み合わせや時制について理解されている割には、会話で相手の情報を引き出すのに必要とされる疑問形 (5W2H) や複文の時制になると正解率が低い傾向がある。英語をコミュニケーションのツールと考えると、疑問形 (5W1H) や複文の時制の一致の理解は重要であり、会話として「英語を使う」ことができない原因と考えられる。

60点未満の学生については、①基本的な単文の文型 (SVと SVO) の理解度が低く、基本である英語の語順の理解ができていない。

② 疑問形 (Yes/No Questionと 5W1H Question) については、Yes/Noの単純な疑問形の理解も完全ではなく、疑問形 (5W1H)

の基本的な知識がかなり低く、5W1Hのそれぞれの英単語の意味、5W1Hの単語を知らないなど基本的な知識がない傾向が強いことが全体との正解率の差から明らかになった。

また、③4つの時制 (現在形, 過去形, 未来形, 現在進行形) の理解度については動詞の変化の知識が薄く、ほとんどの学生が4つの時制の区別が理解できない状況だった。

この結果から、60点未満の英語再学習プログラム履修対象者は、英語の基礎知識力が全体の値からもかなり低いことがうかがえる。そのため、基本的な英語を学ぶ機会を必要としていると考えられる。

3. 本学学生の英語に関する意識

3.1 英語意識調査結果

2010年度も本学において学生の英語に対する意識調査を60点未満の英語再学習プログラム履修対象者について、記述式アンケートで行った。

調査の対象科目は、英語再学習プログラムである「基礎からの英語Ⅱ (3日間集中授業)」, 「基礎からの英会話Ⅰ・Ⅱ (週1回, 15週)」の履修者42名を対象に「英語に関する自己評価」というタイトルで授業初回に実施した。

結果として、「英語は好きですか?」という質問に対して、「基礎からの英語」では77%, 「基礎からの英会話」では41%の学生が「英語が嫌いだ」と答えている。

「英語を使う機会があるか」については、「基礎からの英語」では、85%, 「基礎からの英会話」では、69%の学生が「英語を話す機会を持たない」と考えている。

「英語を学習する必要があるか」については、両科目とも100%の学生が「必要だ」

図表2-1 英語に関する自己評価アンケート集計結果 英語の必要性 2010年実施

アンケート内容 対象クラス:英語再学習プログラム	英語は		英語を使う機会が		学習の必要性	
	好き	嫌い	ある	ない	ある	ない
基礎からの英語	23%	77%	15%	85%	100%	0%
基礎からの英会話	41%	59%	31%	69%	100%	0%

図表2-2 英語に関する自己評価アンケート集計結果 伸ばしたい能力 2010年実施

アンケート内容 対象クラス:英語再学習プログラム	英語を学ぶにあたって、伸ばしたい能力は何ですか？				
	文法力	単語力	会話力	聞き取り力	読解力
基礎からの英語	61%	54%	92%	61%	61%
基礎からの英会話	38%	24%	62%	38%	34%
再学習プログラム教科順位(多い順)	②	④	①	②	③

と答えている。つまり、英語再学習プログラム履修者の全員が「英語は必要だ」と感じている。(図表2-1)

また、「英語を学ぶにあたって、伸ばしたい能力は何か」という質問に対して、複数回答ではあるが、回答の多い順に並べると、「会話力」については、「基礎からの英語」92%、「基礎からの英会話」62%、「文法力」については、「基礎からの英語」61%、「基礎からの英会話」38%、「聞き取り力」については、「基礎からの英語」61%、「基礎からの英会話」38%、「単語力」については「基礎からの英語」54%、「基礎からの英会話」24%、「読解力」については、「基礎からの英語」61%、「基礎からの英会話」34%という結果であった。(図表2-2)

英語再学習履修者は、英語嫌いが多く、英語を話す機会が少ないが、全員が将来的に英語を学習する必要性を感じており、特に伸ばしたい能力は「会話力」であることが分かった。

3.2 英語とのかかわり方

2010年度英語再学習プログラム履修者を対象に「過去、現在、未来についての自分と英語とのかかわり」について自由記述式(500字以内)でアンケートを行なった。

再学習プログラム履修者の英語学習年数は、小学校英語教育導入前の学生であったため、基本的には、中学・高校の6年間と大学での1年間を加えた7年間である。英語学習年数の集計結果から、「基礎からの英語」では、8年31%、10年15%、12年以上8%であり、8年以上がクラスの54%、「基礎からの英会話」では、8年10%、10年14%、12年以上17%あり、8年以上がクラスの41%であった。英語教育が始まる中学より以前の小学校及び幼稚園で英会話教室経験者が約半数いることがわかる。(図表3)

英語が苦手になった時期については、「中学から英語が苦手になった」は「基礎からの英語」85%、「基礎からの英会話」100%、「基

図表3 英語に関する自己評価アンケート集計結果 英語学習年数 2010年実施

アンケート内容 対象クラス:英語再学習プログラム	英語を学び始めてから何年ですか					
	7年	8年	9年	10年	11年	12年以上
基礎からの英語	46%	31%	0%	15%	0%	8%
基礎からの英会話	59%	10%	0%	14%	0%	17%

基礎からの英語」の残り15%は、「高校から英語が苦手になった」の回答であった。

英語が苦手になった学生の理由を自由記述から分析すると、中学で英語が苦手になった履修者は、「文法（語順、3人称、動詞の変化など）」「単語の暗記」「単語の読み方とスペルの違い」など覚えることができず、授業についていけなくなったという基本的な部分での理由が80%もあった。

その他、「テキストを読む授業が多く、会話にほど遠かった。」「つまらないと思い始めたら、授業についていけなくなった」「英会話教室での授業と学校での授業との間にギャップを感じた。」「テーマや会話内容が身近なものからかけ離れていた。」「登場人物の名前に違和感があって好きになれない。」「英語を学校以外の場所で使ったことがなかった。」などが挙げられる。

高校で英語が苦手になった履修者は、基礎からの英語の履修者の15%だが、「受験英語や高度な文法の授業が始まってつまらなくなった。」「英語は将来必要だとわかっているも中学の時のように楽しいと思えなかった。」などが挙げられる。

4. 今後の外国語学習プログラムの方向性

4.1 共通達成目標とレベル設定

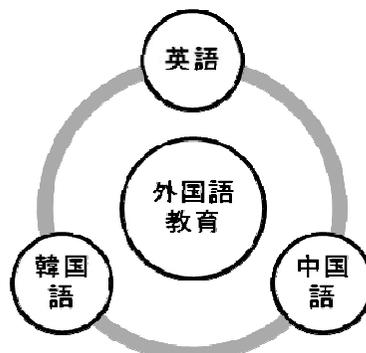
2012年より新規外国語科目「実践韓国語」

が加わり、今後、英語とそのほかの語学（中国語・韓国語）を含め外国語の新たな外国語学習プログラム開発が課題となってくる。

2012年度英語プログラムについての目標を以下の3つ①英語の基本を復習し、ロールプレイを通して、身近な実践的な会話を学ぶ。②英語での日常に役立つ語彙を増やし、身近な話題を表現できる。③英語圏の事情や文化などが分かり、異文化についての見解を広めるきっかけとなる。とした。

2012年度では、本学の学生の英語力を鑑みて、新規科目として「入門実践英語」「応用実践英語」をその他の外国語「入門実践中国語」「応用実践中国語」「入門実践韓国語」「応用実践韓国語」と同様に、初心者を対象とした語学教育として、3カ国語共通の達成目標を立てた。図表4)

図表4 3ヶ国語の外国語学習プログラム共通達成目標



2012年度の新たな外国語学習プログラムの実施を機会に、既存の英語、中国語の内容を見直し、「使える外国語」をゴール目標とし、その目標を達成するため、新規外国語科目「実践韓国語」を含め3カ国語（英語、中国語、韓国語）のカリキュラム運営を検討した。その結果、各外国語教員の運営のための共通項目設定の必要性があり、以下の5つ①授業進行順序②テーマ（5テーマ）③授業回数の配分（1つのテーマ×3回）④修得目標単語（100語）⑤ロールプレイ（5ケース）とした。これを基本とし、シラバスの作成を行った。

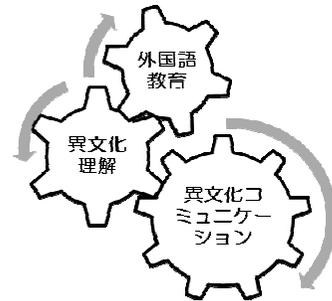
外国語の能力判定基準となるレベル設定において、初心者を対象とした語学教育の具体的な内容を鑑みた基準設定を考え、基本的な語学知識と学習内容の土台を以下の4つ①基本文字表記（発音を含む）②基本文型（語順を含む）③肯定文④疑問文に絞った。

また、文字表記の学習において、中国語・韓国語では、文字とその読みの対応がまったく理解できていないところから学習をはじめするため、3カ国語の進度をそろえるために、英語では筆記体の学習を取り入れることにした。筆記体は、短期間で覚えられ、学習の満足度が高く、学生の一部からの要望もあったためである。そのためのノートテイキング課題を導入する。

4.2 異文化理解と外国語教育

本学の「英語能力判定テスト」60点未満の英語再学習プログラム履修対象者への「英語に関する自己評価」の結果からも、英語嫌いだとしても英語の必要性を感じていることがわかった。また、英語への興味があることも、英語とのかかわり方調査によって理解できた。

図表5 3カ国語外国語学習プログラムの基本構造



外国語は、言語であり、言語はコミュニケーションのためのツールとして使われることを条件として鑑みると、国によって同じ言葉でも感覚的な意味の違いがあり、その国の言葉に直訳できたとしても、その国の持つ文化的背景によって、ニュアンスがうまく伝わらないこともある。そのためには、異文化理解を語学教育に組み込むことは必須事項と考える。

外国語の学習において、理想の最終目標は、「日本国内で外国の方と接する場合に使える外国語」にある。そのためには、学ぶ外国語の背景にある文化に興味があれば、その言語を学ぶ目的があいまいになり、学習意欲を見失う傾向が考えられる。

2012年度新規英語科目「実践英語」では、そのほかの外国語（中国語・韓国語）を含めた新たな外国語学習プログラム開発の上で、異文化理解を含め、共通のテーマ、教授法、達成目標が必要となる。共通の5つのテーマごとに、共通の単語、フレーズ、ロールプレイングの基本会話例をまとめた「外国語共通シート」を共通補助教材として作成する。「外国語共通シート」の中の「単語、フレーズ

覧表」では、「日本語にあり，英語，韓国語，中国語にない表現」，「英語，韓国語，中国語にあり日本語にない表現」が含まれており，各外国語教員の解説を通じての異文化理解を語学教育に組み込んだプログラムを検討している。

本学マネジメントリサーチセンターによる「新入社員のグローバル意識調査」（2010年度実施）の調査結果では、「自分に不足していると考えられる能力・知識」として，語学力89.3%，異文化コミュニケーション能力52.5%が挙げられ，社会人なり，グローバル人材の育成に向けて，「語学力」と別に，「異文化コミュニケーション」という「実践的な外国語によるコミュニケーション力」と「異文化理解」の必要性を感じていることがわかる。

2012年度に向けた本学での外国語教育において，その国の文化により作り上げられた3つの語学を実践的かつ感覚的に学ぶことが大切であり，異文化理解も語学修得の必要不可欠な知識と考え，これからの日本でのグローバル人材の育成に向けて重要な鍵となると考える。（図表5）

4.3 コミュニカティブ・アプローチによる学習法の有効性

「コミュニカティブ・アプローチによる最新の教授法」^{注1)}は，以下の3つの原則に基づく。
①コミュニケーションのためのツールとしての自然な英語だけを覚える。②全部を聞き取る力より，ことばの意味を超えて相手の意図を推測する力を養う。③「覚える」より，楽しく「使う」を優先する。この教授法の推進者でもある東後勝明氏によれば，この3つの

原則を守れば，「使える」英語に到達できるとしている。

また，本学紀要44号において「英語授業における教育効果向上のためのプログラムの現状と開発の方向性」に記載した，アイビーリーグ（IVY League大学）の1つであるコロンビア大学附属英語機関（Columbia University, American Language Programs, 以下ALPと表記）^{注2)}の指導教官への「日本人の英語力の特徴」についてインタビューを行った際，「初期レベルでの日本人への英語教育では，リスニング力とスピーキング力を高めることは有効である」というアドバイスを受け，本学新規外国語学習プログラムへの導入の基礎とした。

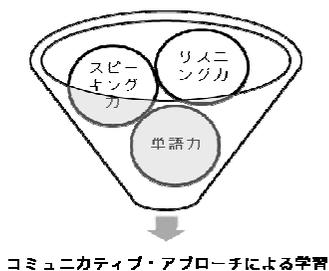
また，新しい学び方への模索・研究として，本学紀要43号「英語自己学習プログラム開発研究」，44号「英語授業における教育効果向上のためのプログラムの現状と開発の方向性」に記載した「ピンズラーアメリカ英語」，「ピンズラー韓国語」，「ピンズラーアメリカ中国語」のユーキャン通信講座を受講及び教授法研究を行った結果，テキストに頼らない音からの学習方法がコミュニカティブ・アプローチによる学習法に必要な要素と考える。

コミュニカティブ・アプローチでは，従来の学習法がパターンを覚え，正確な発音を機械的に反復練習するのに対し，ペアワーク，ロールプレイング課題や発表を通してより自然なコミュニケーションを体得する方法である。

本学の学生の英語能力分析結果からも，2012年度新規外国語科目「入門実践英語」，「応用実践英語」，「入門実践韓国語」，「応用実践韓国語」，「入門実践中国語」，「応用実践中国

語」の開発に向けて、上記の考え方を基本にし、授業プログラムとして「①発音に重点をおきながら、聞く・話すという基本的な言語能力を同時に訓練するように授業を進める。②ネイティブ・スピーカーの発音を直接示し、コミュニケーションとして「使える外国語」を話す機会を増やす。③ノートテイキングの課題を通して、外国語の文字に慣れる。④ペアワーク、ロールプレイング課題や発表を通して、実際の場面での外国語の単語や会話文を体得する。」コミュニケーションに必要な授業カリキュラム開発を進めている。図表6-1)

図表6-1 コミュニカティブ・アプローチによる学習に必要な要素



5. 今後の課題

2010年度「英語能力判定テスト」の結果から、英語再学習プログラムを履修する学生は、英語の基本的な部分（基礎英語力）が一般学生に比べ、非常に低く、特に会話で必要とされている疑問形や時制（Be動詞、一般動詞）の違いなどの基本的な知識がなく、会話を楽しむまでの基本的な英語を学ぶ機会を必要としていることがわかった。

その反面、2010年度の英語意識調査の結果

からも将来的に全員が「英語を学習する必要がある」と考えており、「基礎からの英会話（週1回15週）」履修者は、41%が英語嫌で全員が中学から英語の授業についていけなかったと回答している割には、苦手ながらも、「英会話」を意識し、最後のスピーチコンテストのレベルまで到達できた。授業後のアンケート結果からも、「最初は難しかったが、英語が好きになった」、「嫌だったが、スピーチコンテストまでできるようになってうれしい。」「すごく苦手だったが、これから英語をやろうと思えるようになった」といった前向きな回答が多かった。

英語再学習履修者においては、「好きこそ物の上手なれ」ということわざにあるように、「英語嫌い」の学生について「英語が好き」になることが前提であり、正確さよりも学生の積極性を重視した楽しい英会話を体験することが必要である。また、全員が「英語が必要だ」と考えている限り、英語能力が低くても、「英語を話す機会」を増やすことで、使う面白さや英語の必要性を感じてもらえることが大切である。

この結果を鑑みて、2012年度より新たな外国語学習プログラムの開発に向けて、「英語嫌い、苦手意識の強い履修者」については、コミュニカティブ・アプローチによる学習法を取り組むことで、英語で話す機会を増やし、外国語を使う楽しさを体験できれば、改善されると期待したい。

2012年度は、新たな外国語科目「実践韓国語」を含めた3カ国語からの選択肢があり、語学教育レベル設定を統一し、3カ国語（英語、韓国語、中国語）の共通のテーマによる共通の授業進行を検討している。

2012年度新たな外国語学習プログラムに向けて、今回の調査で得られた結果は以下の「①教員は英語能力の格差が混在するクラスを授業運営していること②コミュニカティブ・アプローチによる教授法を取り入れるには、従来の語学教科書とは異なる。③文字表記学習のためには、ノートテイキングが有効である。④調査による学生の外国語能力の把握は、外国語学習プログラムの達成目標やテーマ設定をする上で重要である。③コミュニカティブ・アプローチによる語学教育法が効果的である。④異文化理解を踏まえた上での外国語学習プログラム開発が必要である。」が挙げられる。

今後は、本学の英語に対する意識調査・分析を継続し、また、2012年度外国語の新たな学習プログラム試行の年であり、外国語語(英語、中国語、韓国語)担当教員との協働により、今後の履修者の傾向も鑑み、教育効果や授業運営の改善に向けて、新しい教授法も含めた調査、研究を続けていきたい。

注

1. コミュニカティブ・アプローチによる教授法は、NHKラジオ英語講師として活躍された東後勝明氏は、日本人が英語を使えるようにならないのは、どこかに決定的な要因が潜んでいるに違いないと確信し、これまでの文法、文型中心の勉強に限界があり、フレーズを覚え、練習をし、それから使うようになるという勉強の順序では「使える」ところには到達しない、ことばを知っていることとコミュニケーションとして「使える」こととは別の問題であると考え、1998年に日本の英語教育の「最後の教授理

論」として「コミュニカティブ・アプローチによる最新学習法」を日本に紹介した。

2. Columbia University, American Language Program の総称。外国人を対象とした大学付属英語教育機関。大学独自のテストにより、クラス分けを行い、レベル3～8までの受講生のさまざまな目的に応じて、高度な英語教育を提供している。レベル8クラスはTOEFL600点程度。

参考文献

- 麻生晴一郎, 旅の指さし会話帳④中国語, 情報センター出版局, 2002, 128p.
- 阿部 一, コミュニケーションの核となる基本英単語の意味とイメージ (Essential Vocabulary for Communication), 研究社出版, 1993,438p
- 池谷普一, ビジネス指さし会話帳②英語, 情報センター出版局, 2010, 128p.
- 榎本年弥, 旅の指さし会話帳⑨アメリカ, 情報センター出版局, 2008, 128p.
- 亀山純香, ビジネス指さし会話帳①中国語, 情報センター出版局, 2009, 128p.
- 北山節子, ビジネス指さし会話帳⑤韓国語, 情報センター出版局, 2009, 128p.
- 鈴木深良, 旅の指さし会話帳⑤韓国語, 情報センター出版局, 2004, 128p.
- 高田誠, 成功へのみちしるべ英語の学び方, 旺文社, 1993,591p.
- 東後勝昭, 英会話 最後の挑戦 コミュニカティブ・アプローチによる最新学習法, 講談社, 1989,189p.
- 松本 亨, 書く英語 基礎編, 実用編, 英友社, 2008,425p.
- 安田正&ジャック・ニクリン, 英語のプレゼン

- テーション技術 (English Presentation Techniques), The Japan Times, 1993, 590p.
- DVD英語教材「Japan Laim Original DVD Series EDUCATION 英語教育 Hot Issue!」
ジャパンライム株式会社, 2010
- ビンズラーアメリカ英語, 韓国語, 中国語
<http://www.serendipper.net/>,2012/1/15
- 文部科学省 国際教育, http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/gaigokugo/jouhou/tokubetu.htm,2012/1/15
- ユーキャン通信教育講座,
http://www.u-can.orjp/course/data/in_html, 2012/1/15
- Azar, Betty S. "Understanding & Using English Grammar", Prince-hall, Inc., 1999, 387p.
- Fingado, Gail & Jerome, Mary R. (ALP, Columbia University), "English Alive", Little, Brown and Company, 1982, 398p.
- Wegmann, Brenda and Knezevic, Miki P, "Interactions I, II", "Mosaic I, II", McGraw-Hill Publishing Company 2002, 399p.